

パンフのボリュームアップのための文章

文責：itoken

吉田寮で作成されるパンフには主に「入寮パンフ」と「寮祭パンフ」の2種類があるが、最近のパンフはそのボリュームという点において若干のさびしさが見受けられる。もともと文章を書くのが好きだった（そして寮のパンフを書くことが入寮の目的の20%ほどを占めていた）わたしは、そのままではぺらぺらになりそうなパンフのボリュームアップのためにこれまで何度か一夜漬けで原稿を書いてきた。書き始めてしまえば4ページでも8ページでもそれほど苦勞せず書くことができ、中身があるようなないようなわたしの文章はなぜかそれなりの評価を受けてきた、気がする。そして、今回も締切直前（残り24時間も無い）になってパソコンを立ち上げ、ビールを飲みながらパンフの原稿を書くわけである。

わたしは中学・高校・浪人とすべて寮生活だったため、今年の4月で寮生活は10年目になる。中学・高校は中高一貫校だったが寮は別（同じ建物ではあったが）だったため、住んでいた寮としては4つめである。しかし、中学・高校・浪人時代の寮と吉田寮は天と地の差があり、とにかく管理が厳しく不自由きわまりない生活を強いられた大学入学以前の寮に比べれば、吉田寮はまさに自由の楽園、天国である。入寮2年目（4月から3年目）の今となっても吉田寮での生活には飽きないし、吉田寮に入ったことを後悔したことは一度たりともない。

わたしが吉田寮での生活を始めたのは2008年3月下旬のことであり、新入寮生が最初にあてがわれる「旧印刷室」という大部屋に入ったときには、すでに空きスペースは畳1枚分しかなかった。「ここを確保しなければ自分の未来はないのではないか」という直感が走り、まずは自分の荷物を置いて場所を確保し、部屋の隅に置かれていた布団の中から比較的シミ・汚れの少ないものを選んで今後のパートナーとして定めた（その布団は半年後に酔っぱらいのゲロにまみれて葬られることになる）。

しばらくすると別の新入寮生が家族連れで入ってきて、もはや空きスペースの残っていない薄汚い部屋を見て呆然としていた。最後のスペースを確保してしまった立場としてはなんとなく居心地が悪く、何か話しかけられたらどうすればいいのかわからなかった。しばらく気づかないふりをしたあと、そそくさと部屋を出た（なお、結局それ以後何人も新入寮生が旧印刷室に入り、最盛期の人口は11人となったが、がんばれば寝るスペースなどなんとでもなるようで、特に問題は生じなかった）。

吉田寮での生活はそんな感じでスタートしたが、当初はとまどうことも少なくなかった。部屋の中を観察し、クリアボックスの中に5巻だけ欠けた『DEATH NOTE』とヒトラ一の『わが闘争』を発見したときには「わたしはここにいて大丈夫なのだろうか」と不安になったし、3月や4月の間は朝起きたらなぜかノドが痛かったり、シャワーを浴びたら鼻血が止まらなかつたりと、健康面での被害は避けられなかった（なんてたって明らかにホコリっぽい部屋なのである。なお、これらの健康被害を総称して「旧印病」と呼ぶことがある）。しかし、どんな環境であってもしばらくすれば慣れるもので、5月にもなれば生活リズムも不安定に安定し、抵抗力もつき、たくましい寮生となっていく。

吉田寮に住むメリットは数えきれないほどあるが、大きなものとしてはやはり「安さ」と「楽しさ」があるだろう。このふたつを最大限享受できる場所が吉田寮であり、その点からいえば下宿を選ぶ人の気持ちはよくわからない。まあ、下宿には下宿なりのメリットがあるのだろうが、吉田寮に住むメリットは下宿のメリットをはるかに凌駕するのだとわたしは信じて疑わない。

吉田寮に住むにあたって支払わなければいけないお金は、年間たったの3万円である。吉田寮の案内は赤本やら京大の入学案内やらに書いてあるだろうが、そこにある「寄宿料400円」の記述を見て目を疑った人は少なくないはずだ。小学校教師の初任給が1万円とかの時代じゃないんだからそんなに安く住めるはずがないじゃないか、と思うのが普通の人間の反応かもしれない。しかしこの400円というのはまぎれもない真実であり、これまでの寮生がずっと守り抜いてきた数字なのである。吉田寮にひと月住むのにかかるお金は、寄宿料400円・水光熱費1,600円（多少変動あり）・自治会費500円の合計2,500円であり、1年間で3万円、それだけである。正式な入寮後しばらくして寮費担当の人に3万円を支払えば、あとは1年間電気もガスも水道も自由に使いながら生活ができる。「今月の家賃まだ払ってないんだよね」「ガス代しばらく払ってなかったらガスが止まって、昨日はティファールでお湯わかしてシャワー浴びた」などと言う下宿生たちの話を聞くにつけても、吉田寮に住んでいてよかったと思う。寮費以外に徴収されるお金がないので、バイト代や仕送りはかなり自分の好きなように使えるし、とりあえず「生活に困る」ということはないといっているんじゃないだろうか。

また、家具などの生活用品を寮生同士でシェアしながら使えるのも大きな魅力である。そもそも下宿生活というのは非常にムダが多いと思う。洗濯機や電子レンジなど1日に何度も使うわけではないし、冷蔵庫にしてもひとりで使うには大きすぎる気がする。そ

の点、寮ではひとりが買ったものを何人かが使ったり、ひとりで買うには高いものを何人かでカンパを出して買ったりすることができる。筆記用具・ハサミ・食器などの生活用品も寮の中を探せばだいたいなんとかなるから、新しい生活を始めるうえで購入しなければならないものは非常に少ない。事実、わたしが吉田寮での生活を始めるにあたって購入したものは枕とクリアクリーンくらいのものである。マンガや書籍もいたるところにちらばっているから勝手に読めばいい。大学に入るまでマンガをほとんど読まなかったわたしが、寮にいたおかげで知ったマンガはいくつもある。

「安さ」以外のメリットである「楽しさ」についてであるが、寮にはとにかくいろいろな人がいるから、年齢・性別・国籍の垣根を越えた人間関係を築くことができる。いつでも周りに誰かがいて話ができるし、鍋を囲んで酒を飲むこともめずらしくない。大学に入ってからさびしがりやになったわたしが、もし下宿を選んでいたら、と思うとぞっとする。だって家に帰っても誰もいないのである。誰もいない部屋の電気をつけ、ため息をつきながらテレビのスイッチを入れるような生活じゃなくて本当によかった。

学部やサークルの人たちと話していると、彼らはやはりある一定の枠内に収まった大学生活を送っているように見受けられる。海外旅行に行ったり1年間留年したりというくらいの人はいても、休学して海外を放浪したり、留年しすぎて8回生くらいになってしまったという人はほとんど見ない。これも学部やサークルなど年齢の近い人たちのコミュニティであるから仕方がないのだろうが、吉田寮ではある意味「はみだした」生き方をしている人が多い気がする。自分は同じような生き方はちょっとできないけれど、でも心のどこかで尊敬してしまうような、そんな人がたくさんいる。大学に入るまで、そして大学入学後もたくさんの人と出会ってきたけれど、こんなヤツ見たことないぜ、という人がゴロゴロいる。すごい世界だ。

現在の吉田寮は建て替え問題をめぐって大学側と議論がなされている最中であり、今後5年10年でその状況がどう変わるかはまったくわからない。しかし、築100年弱（日本最古）の、しかもいまだに自治権を守り抜いている学生寮である吉田寮で生活していることをわたしは誇りに思うし、吉田寮での4年間（で卒業できればの話だが）はわたしにとって一生忘れられない思い出になるだろう。夏暑く（1回生の夏は特に暑く、パソコンの前にいると熱気で息ができなくなりそうだった）冬寒い（デフォルトで5℃、暖房つけて10℃いかないときもある）という最悪の環境。料理をするにもトイレに行くにも廊下を行ったり来たりしなければいけないという不自由さ。試験直前にもかかわらず存在する総会（わたしは出席率が低い。そろそろ出るようにしよう）。快適な下宿生活から考えれば地獄ともいえるこれらのデメリットを補ってあまりあるくらい、吉田寮

は楽しい。

このパンフを読んで吉田寮に興味を持ったなら、ぜひとも入寮を検討してほしい。そして、吉田寮の新たなメンバーになってくれたときには、わたしたちは全力であなたを歓迎するだろう。